

# アイヌの宝物とツクナイ

関 根 達 人

## はじめに

アイヌの宝物には、役に立つがゆえに価値あるもの（イヨクペ）と豪華で素晴らしいもの（イコロ）がある。美しい金属で飾られた刀や矢筒など多くのイコロを所持する者がニシパ（ニシは「空」、パは「上の・長」を表す）と呼ばれるように、イコロは威信財であった。

一般に宝物のうち、シントコと呼ばれる行器・耳盥・柄杓・蓋付の大椀・オッチケと呼ばれる膳の上に並べられた4組の杯・天目台・棒酒箸などの漆器類は、アイヌの家屋のソパ（上座）近くの北側の壁に沿って並べられ、刀類や矢筒は、削り房とともに後ろの壁に吊り下げられる。マンローの記録によれば、トンペ（光り輝くもの）と呼ばれる金属装飾の施されたイコロは何の霊力もない手で触ると魔除けの霊力が薄れると考えられ、わざわざぐすんだまま屋内に安置されていた（小松訳2002）。アイヌの人々は時に宝物を身内にも内緒で山中に深く秘蔵した。特に「ベラシトミカムイ」（「篋のついた宝器」の意）や「キロウ」（「角」の意）と呼ばれアイヌの宝物のなかで最も重要とされる鍬形は、病人の枕元において災いを払うなどの霊力があり、家に置いておくと祟りをなすため、普段は「地室に蔵し」（新井白石「蝦夷志」）あるいは「深山巖窟に秘蔵し安ずる」（松前広長「松前志」）という。

アイヌの人々が宝物とした漆器も武器・武具類も基本的には和製品であり、しかも古体を示すものほど貴ばれる傾向にあった。アイヌに伝わった漆器や刀類には、鎌倉・南北朝・室町時代に製作されたものや、それを真似たものが少なくない（金田一・杉山1943）<sup>1)</sup>。こうしたアイヌの嗜好について、小林真人氏は、「アイヌ民族が衛府の太刀、打掛け鎧、行器などに接するのは、それらが実際に使われていた時代であって、おそらくはアイヌ民族が土器文化を捨てるという大転換の過程と深くかかわっていたであろう」との見方を提示した（北海道開拓記念館2001）。

擦文文化・オホーツク文化・アイヌ文化にみられる「ikor的存在」について検討した宇田川洋氏は「ikor的存在」をとおして交易拠点・交易ルートが明らかになるとした（宇田川2003）。

本稿では、史料と出土品からアイヌの宝物にみられる武器・武具の実態を明らかにするとともに、それらの製作・流通に関する仮説を提示する。

## (1) アイヌの宝物

### ① 史料に見る宝物

史料に現れたアイヌの宝とその社会的機能については、岩崎奈緒子氏による先行研究がある（岩崎1998）。

元文4年（1739）成立とされる「蝦夷随筆」（寺沢・和田・黒田編1979）のなかで筆者の坂倉源次郎は、アイヌが和製の古い器物すなわち鐙・目貫・小柄などの刀装具や古い蒔絵のある漆器を宝物として秘蔵し、親子兄弟にも内緒で山中へ隠し置くなどすると記した。

寛政3年（1791）、菅江真澄が松前を出発し有珠岳の登頂を経て虻田まで旅した際の日記である『蝦夷廻天布利（えぞのてふり）』では、シラリカコタン（北海道八雲町）のウセツベというアイヌの家に泊まった際、「やかのかまに財貨といひて、こがね、しろがねをちりばめたる具ども、匱盤（耳盤）、角盤、貝桶などを、めもあやに積みかさね外器（行器）をケマウシシントコとて酒を入れり」、「そびらの壁には、タンネツフといふ、いとながやかなるつるぎたち、あるいはエモシポ、シヤモシポなどの平太刀、頭巾、鉢巻をもませ掛たり」と記し、様々な漆器や刀類が宝器としてアイヌの家屋内に置かれている様が述べられている（内田・宮本編1971）。

「蝦夷島奇観」や享和元年（1801）に東蝦夷地のトンベツ（十勝郡浦幌町）を訪れた蝦夷地御用掛松平忠明随行の磯谷則吉が記した「蝦夷道中記」によれば、トンベツの長人シリメキシユは、年を経て破損が激しいが、本州から伝来した緋威の打掛け鎧である美しい「霊鎧」1領を含む10数領の鎧、他にタンネツ（飾太刀）・エモシ（太刀）・鎌倉時代の行器・古様の黒漆塗り、金蒔絵の耳盤を保有していた。

松浦武四郎の「蝦夷訓蒙図彙」（秋葉編1997）では「土人宝物をトミカモイと惣称し、内地の刀剣の具、また甲冑の類、是をとうとむこと甚し。其に次て行器、貝桶、耳盤、其余漆器惣而古きを貴びて新しきは不悦」とあり、宝物をトミカモイと総称すること、漆器よりも武器・武具の価値が高いと考えられていること、古いものほど価値が高いことなどが確認される。

羽後八森出身で、ノツケ・シベツ場所にて通辞や支配人を務めた加賀伝蔵の遺した記録類（「加賀家文書」）にある「安政四年 黒白正調書」には、ニシベツ川<sup>2)</sup> 留網並びに領境論争において、子モロ場所請負人の藤野家が河口に設置した張切網（留網）により川上に鮭が遡上しないことに難渋したクスリアイヌが、ニシベツ川は天明の頃先祖が宝を差し出して川口まで子モロアイヌから買い取ったとの主張とともに、クスリアイヌが子モロアイヌに渡した宝が列記されている（秋葉編1989）。

タン子ブ	六	クスリ村	タサニシ
イムシホ	六		ヘケレニシ
イムシウンヘ	六		
イカヨフ	六		
メ			

タン子ブ            三   ケウニ村   タラケソ

イムシホ            三

イムシウンベ       三

イカヨフ            三

メ

タン子フ            式   タツコツ   トミチャ

イムシホ            式

エウンベ            式

イカヨフ            式

メ

イムシホ            四   トウロ村   ラホチ

タン子フ            四

エウンベ            四

イカヨフ            四

この史料によれば、クスリアイヌはニシベツ川の漁業権を買い取るために子モロアイヌにタン子フ（太刀）・イムシホ（短刀）・イムシウンヘ＝エウンベ（刀の鞘）・イカヨフ（矢筒）各15点を支払ったと主張している。この主張に対し、子モロアイヌは川売買の件はクスリ側の作り話であるとしてアツケシ役所に訴え出た。それに対して詰調役喜多野省吾が安政4年（1857）3月に下した裁定は、川売買の件については証拠がないと退けたうえで、クスリ小使メンカクシの祖父ベケレニシが昔、銀細工太刀鞘1本と銀盃6個を子モロの四郎左衛門祖父イカシュンテに贈り、ニシベツ川筋通りの管理を頼んだ事実を認定し、川口の張切網漁を禁止するもので、事実上子モロ側（藤野家側）の敗訴が確定した。この一件は、アイヌの宝物の中でも刀類や矢筒が、アイヌの生業の根幹をなす河川の漁業権と対価交換されうるものであったことを示している。

また、ニシベツ川留網並びに領境論争のなかで、文化10年（1813）～天保4年（1833）頃の話として、子モロアイヌのタミシナイが秋のうちにポンベツへ来て梁を仕掛けたところ、クスリアイヌのコリタ・メンカクシ・ムンケケら3人のほか多くの人が番人と一緒にやってきて、タミシナイがポンベツへ梁を設置したことに訴訟をもちかけ、ほかの場所へ梁をかけるとのことなので、仕方なく対価（アシンベ）として、エムシ（太刀）3本・銀覆輪のセツバ（鐔）3枚・銀細工のエムシニツ（刀の柄）3本を差し出したことや、それが必要以上に過大な宝物であったことなどが述べられている。

なお、同じく加賀家文書の「シベツ名主宅蔵申口」には、クナシリ島のセセキという村の村長トベブシがシベツの有力者の娘に求婚する際、「金拵ひ網引形の太刀」という宝物を婚資として出したとの伝承が記録されており、岩崎氏によって紹介されている（岩崎1998）。

## ② 伝承に残る宝物

アイヌの伝承には宝物がしばしば登場するが、特に釧路地方には、カツラコイ（釧路市桂恋）の酋長キリボイエカシの家に代々伝わる白金黄金を鏤めた鎧、ウライケチャシ（釧路市春採チャシ）や布伏内チャシ（阿寒町ポントッコブチャシ）の宝物、金の角をつけた甲を持ったトオヤ（釧路市遠矢）の酋長カネキラウコロエカシなど甲冑を宝物とする伝承が多くみられる（宇田川1981）。これらのなかには「生きた刀」（「妊婦を切った刀」）で奪われた宝物を取り返さず話や「人喰いの刀」で宝物を守ろうとする話も伝わっている。なかでも興味を引くのは、「トイチャシには釧路地方で一番の大將の乙名がいて、春と秋に桂恋・昆布森・遠矢などのコタンにいる家来の乙名に熊皮や鷲の尾羽などを持ってこさせ、多く献上した者にはシャモ地（和人地）から渡ってきたタンネップ（飾太刀）やテコロパチ（角盥）などの宝物をやった」とする松浦武四郎の「東蝦夷日誌」にも記された釧路市トイチャシに関する伝承である。この伝承は、和製の太刀や漆器などの宝物を数多く入手しうる者が、対和人交易品集荷システムの要としてアイヌの酋長層の頂点に立っていたことを物語っている。

## ③ 出土した宝物

出土したアイヌの宝物としては、岩陰や地中に隠したと伝えられる鋏形が宇田川洋氏と瀬川拓郎氏によって、兜が宇田川氏と福土廣志氏によって、鏡が宇田川氏によって検討されている（福土1985、宇田川2003、瀬川2009、留萌市海のふさと館2005）。

ここでは、筆者が実測と材質調査を行った北海道余市町大浜中遺跡・栄町1遺跡と札幌市北1条西8丁目から一括出土した埋納品を取り上げ、アイヌの宝物の実態を確認する。なお、金属製品の材質分析は、弘前大学所蔵のエネルギー分散型ハンドヘルド蛍光X線分析装置（DELTA Premium 日本電子）を用い非破壊非接触で行った。測定条件はX線管：4 WRhターゲット、管電圧：40kV、管電流：200  $\mu$ A（最大）、X線照射径：10mm、測定時間：20秒である。

### 【大浜中遺跡出土品】

北海道余市町大川町字大浜中に位置する大浜中遺跡は、大川遺跡や入舟遺跡のある余市川の河口から東へ約2.2km、海岸線から80mほど離れた標高4m前後の低い砂丘（大川砂丘）上に立地する。昭和26年（1951）、登川の流路切り替え工事に伴い、地表下約60cmから遺物が不時発見されたものであり、出土状況の詳細は不明である。発見された遺物には、陶磁器・内耳鉄鍋・漆器・刀・刀装具・永楽通寶を含む銭・鎧などがあったとされるが（松下1984）、発見後、工事関係者に持ち去られたものもある。現在、余市水産博物館には余市警察署に届けられたものや後日工事関係者から余市町教育委員会が回収したものが所蔵されており、その一部が松下亘氏や佐藤矩康氏によって紹介されているが、一部の遺物については後述する栄町1遺跡の遺物と一緒に保管されていたため、出土遺跡の表記に混乱が生じている（松下1984・佐藤編1990）<sup>3)</sup>。なお、大浜中遺跡の出土品のうち、刀・刀装具については廣井雄一氏、鎧については鈴木友也氏、陶磁器については、吉岡康暢氏と石井淳平氏により各々詳細な報告がなされているが（佐藤編1990、吉岡2001・石井2003）、実測図が

公表されているのは、兵庫鎖太刀の足金物と陶磁器だけであることから、今回、陶磁器以外の遺物について実測し、図面を掲載することとした。

大浜中遺跡からは、胴丸鎧・太刀や腰刀の刀装具・ニンカリ・矢筒もしくは鍬形の装飾用円形金属板・中国産青磁・古瀬戸天目碗・漆器・内耳鉄鍋・永楽通寶が出土している。

胴丸鎧は、胸冠板・背面押付の冠板・脇冠板・杏葉・小札・袴が出土しており、1領分とみられる（図1の全体復元図に残存部位を、図2に部位ごとの実測図を図示した）。胸冠板（1）は鏡地で、薄い鉄板の上に菊唐草文を銀摺付象嵌した銅板を重ね、鍍金した銅製覆輪を巡らしていたとみられるが、鉄板は腐食して失われている。鉄板と銅板は、上部覆輪寄りに打たれた鍍金された小桜鉾によってからくり留めされ、その下には菖蒲文を銀摺付象嵌した横長の銅板を重ね、左右と中央の3か所を二個一対の鍍金した菊笠の八双鉾で固定している。左右の山形のやや内寄りの部分には綿嚙から紐を通すための二個一対の孔が穿たれ鍍金の小刻と玉縁の鶏目が付けられている。背面押付の冠板（2）も胸冠板同様、鏡地で、鉄板の上に菊唐草文を銀摺付象嵌した銅板を重ね、鍍金した銅製覆輪を巡らしており、横一列に打たれた鍍金された小桜鉾によって鉄板と銅板をからくり留めしている。脇冠板（3・4・5）も基本的に胸冠板や背面の押付板と同じ作りや装飾である。杏葉（6・7）は、折曲げの自由をきかせるため、上下に分かれており、鍍金の銅製蝶番で繋がっている。杏葉も冠板同様、鏡地で、薄い鉄板の上に菊唐草文を銀摺付象嵌した銅板を重ね、鍍金した銅製覆輪を巡らしている。杏葉の上半中央には鍍金の銅製菊座据金物が打たれているが、それは打ち出しの菊座を2枚重ねた上に小刻を2枚置き、それらを笠鉾で留めた造りとなっている。小札（14～32）は鉄製で、頭に切付を入れ、左右が丸くなる碁石頭の伊予札である。袴（33）は銅製鍍金で、大きさからみて立挙と脇冠板を連結する脇袴と考えられる。鈴木友也氏は、この胴丸鎧は銀摺付象嵌を施した銅製鏡板を鉄板の上に重ねている点など特異な造りがみられるとした上で、製作時期を鎌倉から南北朝と推定している（佐藤編1990）。

太刀の刀装具には、大切羽・目貫・足金物がみられる（図3）。

1は銅製の木瓜形大切羽で、表面にのみ毛彫りで青海波文を施す。

2は銀の覆輪がかかる銅製の木瓜形大切羽で、四方に猪目を透かし、表面は魚子地にして左右に高肉象嵌で銀桐文を配し、鍍銀を施す。

3は銅製の木瓜形大切羽で、四方に猪目を透かし、表面は魚子地にして上下左右に毛彫りで竜胆文を施す。

4は太刀用の目貫で、銀製花形の座金と頂部を鍍銀した銅製の目釘からなる。

5は太刀用目貫の銀製花形の座金で、唐草と剣を透かし彫りし、表に鍍金が施されている。

6は巖物造太刀に付く兵庫鎖と足金物で、いずれも銅製で鍍金が施されている。足金物は瓶子形で両面上下に羽根を広げた鶴文が高肉彫りされている。永仁7年（1299）の針書銘を有する重要文化財「金銅装鶴丸文兵庫鎖太刀」（熱田神宮蔵）に酷似する。

7は6と組み合う帯執の紋金具と思われ、足金物同様、銅製で羽根を広げた鶴の意匠がみられ鍍



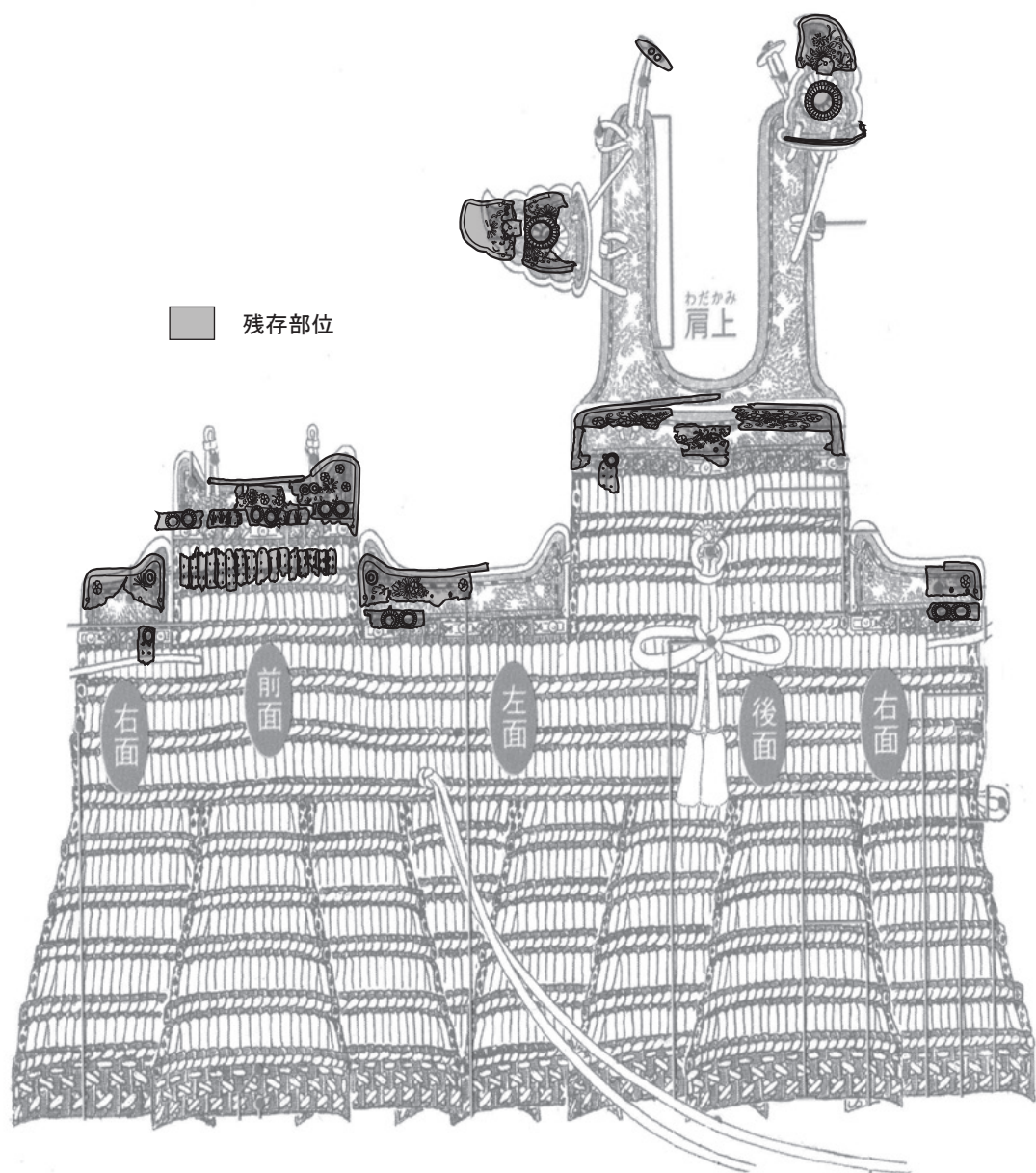


图 1 北海道余市町大浜中遺跡出土胴丸鎧復元図

(筆者作成)

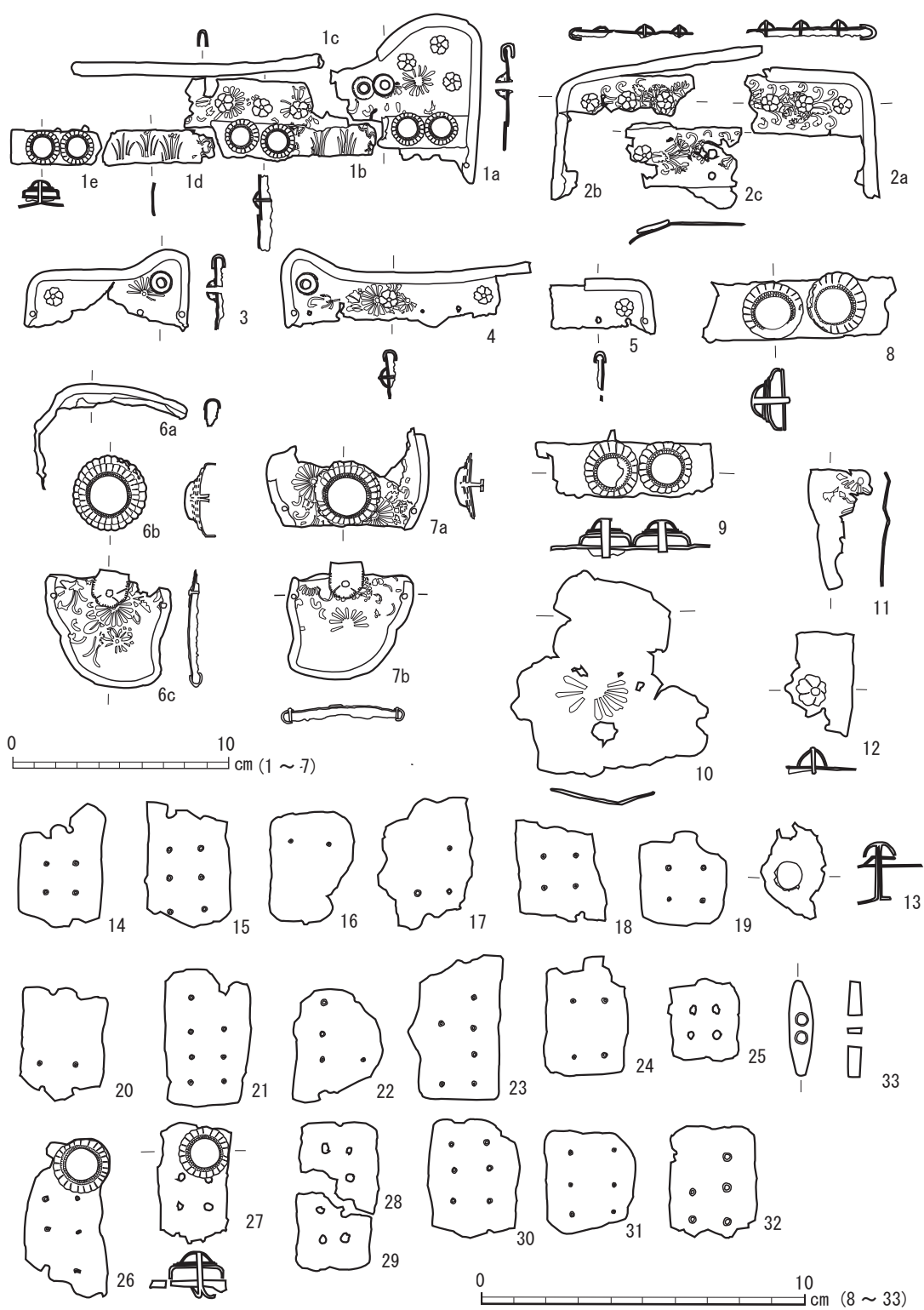


図2 北海道余市町大浜中遺跡出土胴丸鎧

(筆者実測)

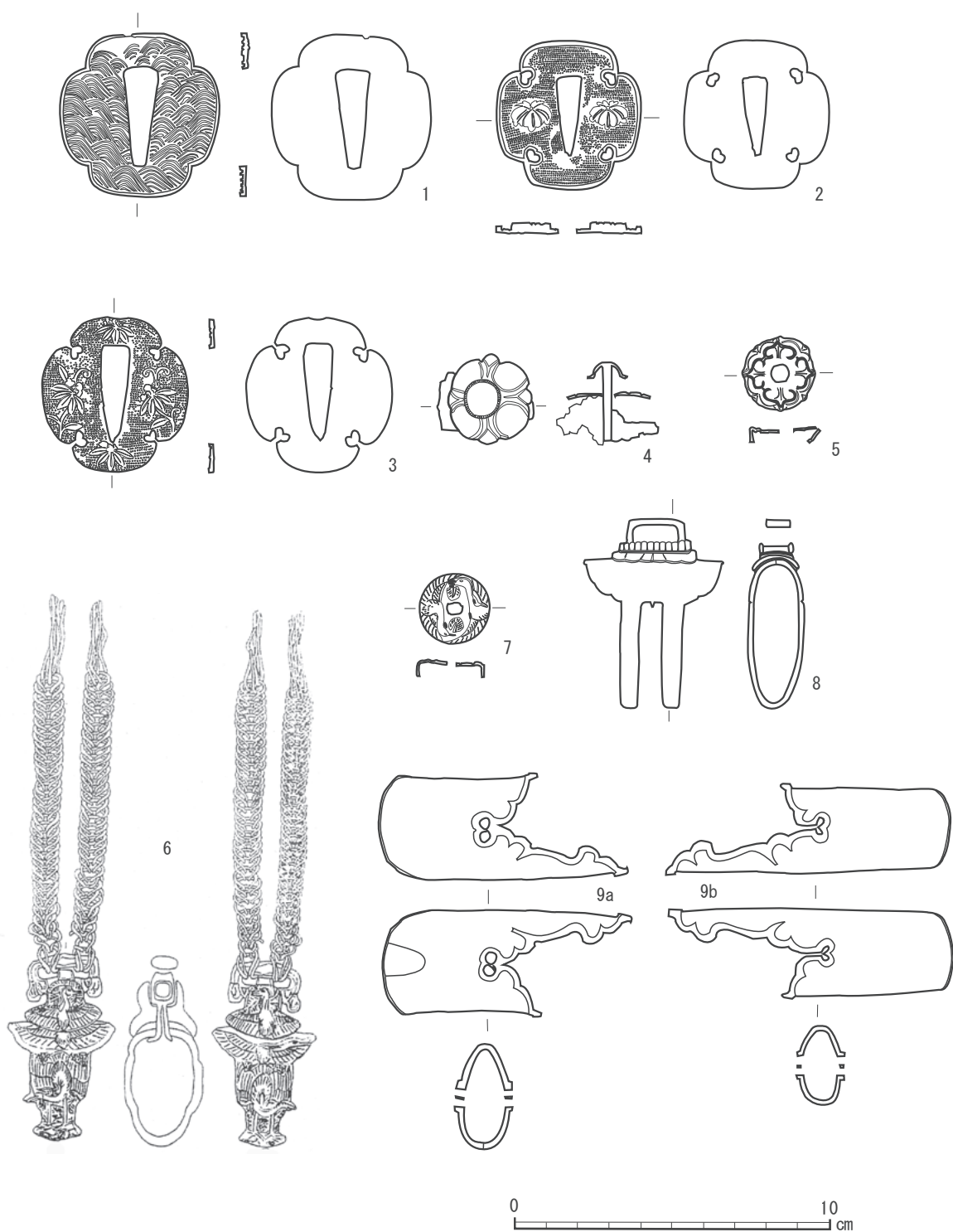


図3 北海道余市町大浜中遺跡出土刀装具

(1～5, 7～9は筆者実測 6は吉岡 2001 より転載)



金が施されている。

8は太刀用の双脚式の銅製足金物で、鍍銀が施されている。甲羅金は花卉形で、槽金の座には花形座・小刻座・堅菊座を重ねている。

9は腰刀の兜金（9a）と鏢（9b）で、銅製である。どちらも中央に猪目透かしを施し、上下の鋏形状の縁を一段高くし、そこに鍍銀を施している。廣井雄一氏は類例として至徳2年（1385）正月、前参議葉室長宗により春日神社に奉納された「菱作打刀」（国宝）を挙げ、石突（鏢）の先が春日神社奉納刀よりやや細くなっていることから、それよりやや時代が下るとの見方を示している（佐藤編1990）。

図4-1～4はニンカリである。材質は、銀製のもの（4）と銅・錫・鉛・亜鉛の合金製のもの（1～3）がある。このようなΩ形のニンカリは、恵庭市カリンバ2遺跡第Ⅵ地点AP-5墓壙（恵庭市教育委員会2000）、厚真町オニキシベ2遺跡1号土壙墓・同3号土壙墓（厚真町教育委員会2011）、恵庭市ユカンボシE4遺跡7号土坑（恵庭市教育委員会1997）からも出土している。カリンバ例は中国産白磁皿D群が共伴しており、15世紀後半から16世紀前半の年代が与えられる。オニキシベ例は1号土壙墓に共伴した鐔形のシトキに加工された山吹双鳥鏡（12世紀後葉～13世紀前葉）やAMS年代測定値からみて14世紀代の所産とみられる。ユカンボシ例ではオニキシベ例と同様の鐔形のシトキが出土しており、近い時期の所産とみられる。

5と6は円形の薄い金属板で、矢筒もしくは鋏形に象嵌されていたものと思われる。

大浜中遺跡から出土した陶磁器（図5）は、中国産青磁無文端反碗1点（1）・同雷文碗1点（2）・同蓮弁文碗2点（3・4）・同端反皿3点（5～7）・同稜花皿2点（8・9）、古瀬戸天目碗（後Ⅳ新）1点（10）がある。中国産の青磁碗4点は全て内底面（見込み）に茶筌擦れと思われるリング状ないし線状痕が認められる。碗が5点、小皿が5点と数が一致しており、小皿を天目台の代わりに碗の下に置き使用した可能性が考えられる。なお、千歳市美々8遺跡（北海道埋蔵文化財センター1996a・1996b・1996c）では茶筌と茶筌擦れのある中国産青磁碗E類が共伴して出土しており、15世紀代には道央部のアイヌに喫茶の風習が伝わっていた可能性がある（関根2011）。大浜中遺跡の青磁碗や天目碗はアイヌの人々が茶碗を宝器として扱っていたことを示しているのではなかろうか。

大浜中遺跡の一括出土品には、胴丸鎧や兵庫鎖太刀の吊金具など鎌倉時代に遡るものも含まれているが、埋納時期は陶磁器や永楽通寶からみて15世末頃とみられる。和人とアイヌの交易拠点として栄え、和人の居住も想定されている余市川河口の大川遺跡は、15世紀中葉には断絶を迎えており、大浜中遺跡とは時期がずれる。

大浜中遺跡の性格については、「本州北部地域の武士団の抗争の結果、敗れた武将が難を逃れるため、ごく少人数である程度の財宝的なものを持ち、落人として現在の大浜中の海岸にたどり着いた址」とする説（松下1984）や、大川遺跡と併存するか、大川遺跡に取って代わった北方交易の拠点とする説（吉岡2001）が示されている。松下説も吉岡説も大浜中遺跡の出土品は和人が残したも

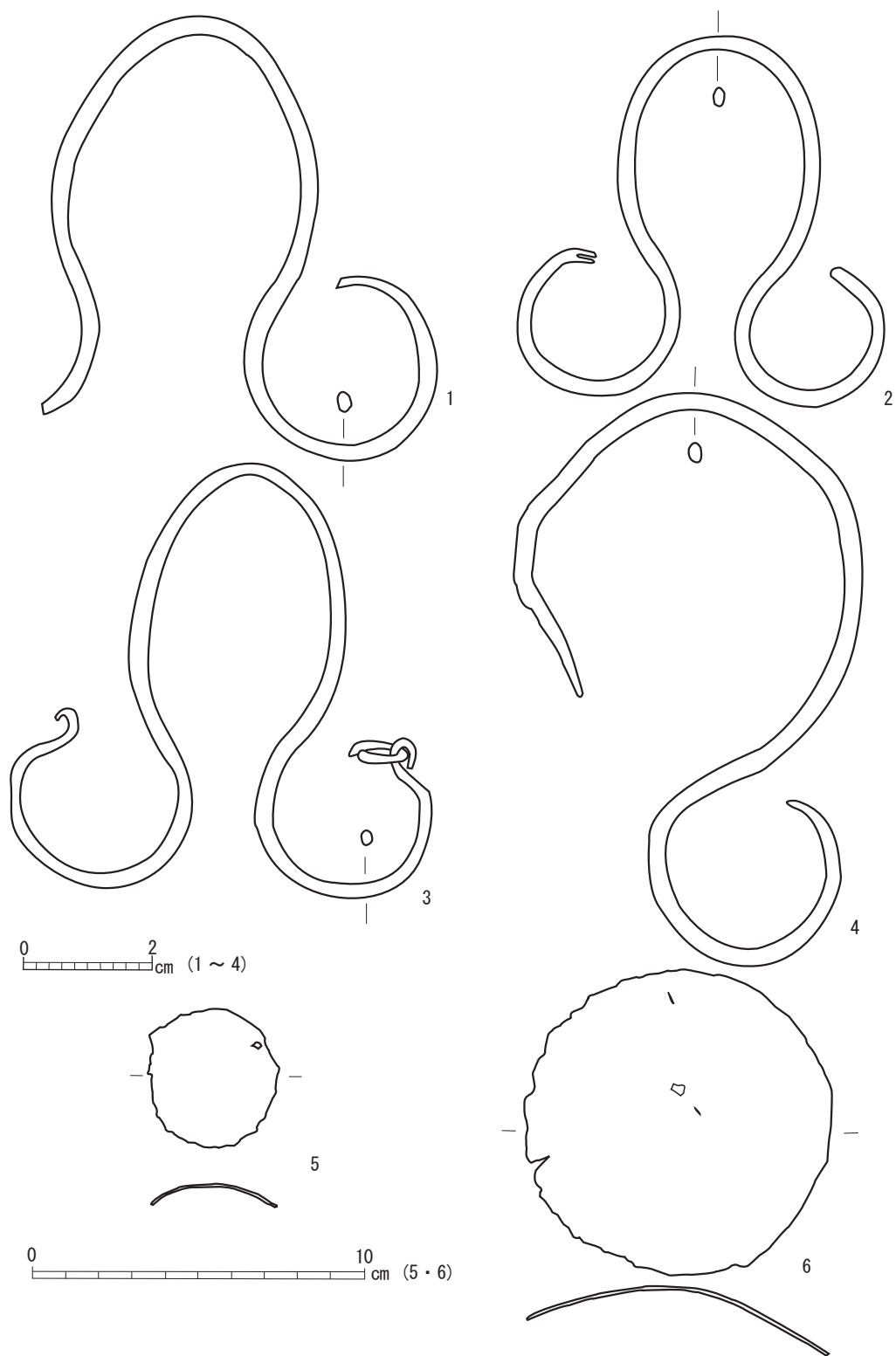


図4 北海道余市町大浜中遺跡出土金属製品

(筆者実測)

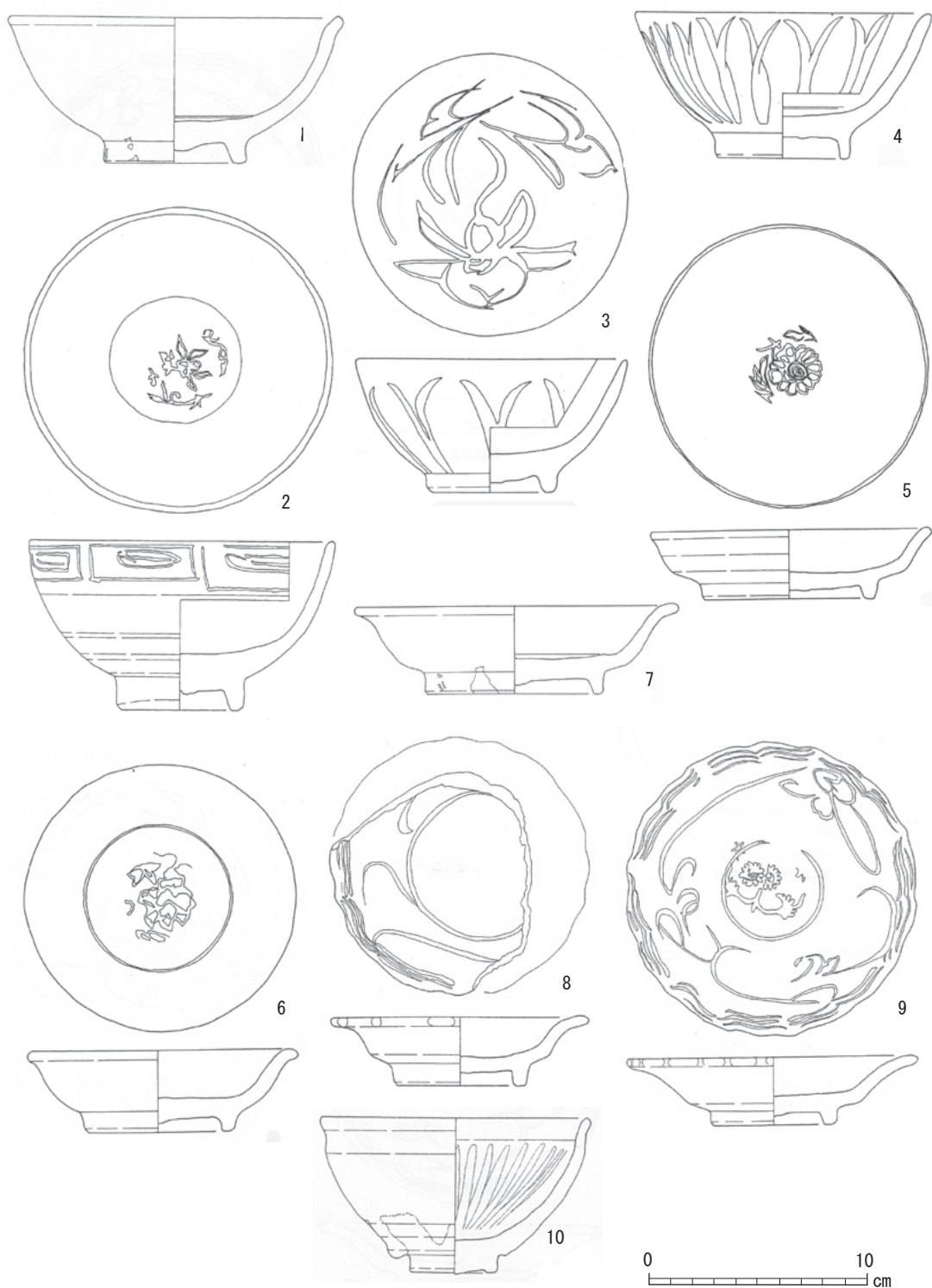


図5 北海道余市町大浜中遺跡出土陶磁器

(石井 2003より転載)

のである点では共通している。しかしこれまでみてきたように、大浜中遺跡の出土品の中には銀製のニンカリや象嵌用円形金属板などアイヌ民族特有の遺物が含まれることから、筆者は余市アイヌが宝物を埋納した場所の可能性が高いと考える。

#### 【栄町1遺跡出土品】

余市町栄町155に位置する栄町1遺跡は、余市川の河口から東へ約4km、史跡フゴッペ洞窟からは東へ約200mの砂丘上に立地する。昭和33年（1958）、畑の拡張作業中に遺物が不時発見された。昭和37年7月に名取武光氏の指導により余市町教育委員会と余市町郷土研究会による発掘調査が行われたとされるが、報告書は刊行されておらず、詳細は不明である（小浜・峰山・藤本1963）。本遺跡から出土した遺物は松下亘氏や佐藤矩康氏によって紹介されているが、前述の通り、大浜中遺跡出土品とのあいだで混乱が生じている（松下1984、佐藤編1990）。栄町1遺跡の出土品のうち、刀・刀装具については廣井雄一氏、白磁については石井淳平氏により各々詳細な報告がなされているが（佐藤編1990、石井2003）、実測図が公表されているのは白磁のみであることから、今回、白磁以外の遺物について実測し、図面を掲載することとした。

栄町1遺跡からは、太刀と太刀に伴う刀装具・腰刀とそれに伴う刀装具・白磁碗が出土している（図6）。

1と2は太刀で、1には銅製の泥障形鐔・銅製の大切羽2枚・小切羽2枚・銅製の釰・鍍銀を施した銅製の柄縁金具・縁に鍍銀を施した銅製の鞘口金具などの刀装具が、2には銅製の細長い銅製の木瓜形鐔が伴い、1の柄縁金具には銀メッキがみられる。

3は上下に突起を有する太刀用の縁金具である。

4と5は太刀用の目貫の座金で、透かしで花文が施されている。

6は腰刀用の兜金（6a）と筒金（6b）で、銅製鍍銀もしくは銀製である。

7は腰刀用の筒金で、7aには栗形が付く。材質は銅製で一部に鍍銀がみられる。

8は腰刀の兜金で、目貫（9a・9b）と組む。兜金は銅製で、側面を猪目透かしと高彫りした菊枝で飾り、加えて菊花に金・銀のメッキを施している。兜金の先端には2か所に孔がみられ、そのまわりに草文が毛彫りされている。対の目貫は大振りで、菊枝が透かし彫りされ、肉厚な菊花には金・銀のメッキが施されている。

10は銅製の鐙で、側面と先端に葉文が高彫りされており、猪目の部分に金が部分的に残っており、鍍金されていた可能性がある。

11はいわゆる口禿の白磁碗で、見込みに花と思われるスタンプ文を有する。13世紀後半から14世紀前半の中国製品である。

以上、栄町1遺跡から出土した遺物は、おおよそ14世紀代に収まるものである。複数の太刀や腰刀が出土しており、アイヌ墓がいくつか存在した可能性も否定できない。しかし8の腰刀は、鎌倉末期の代表的作品として知られる毛利家伝来の国宝「菊造腰刀」（毛利博物館蔵）に匹敵する優品で、イコロと呼ぶにふさわしいものであり、砂地でありながら人骨が発見されていないことも考慮

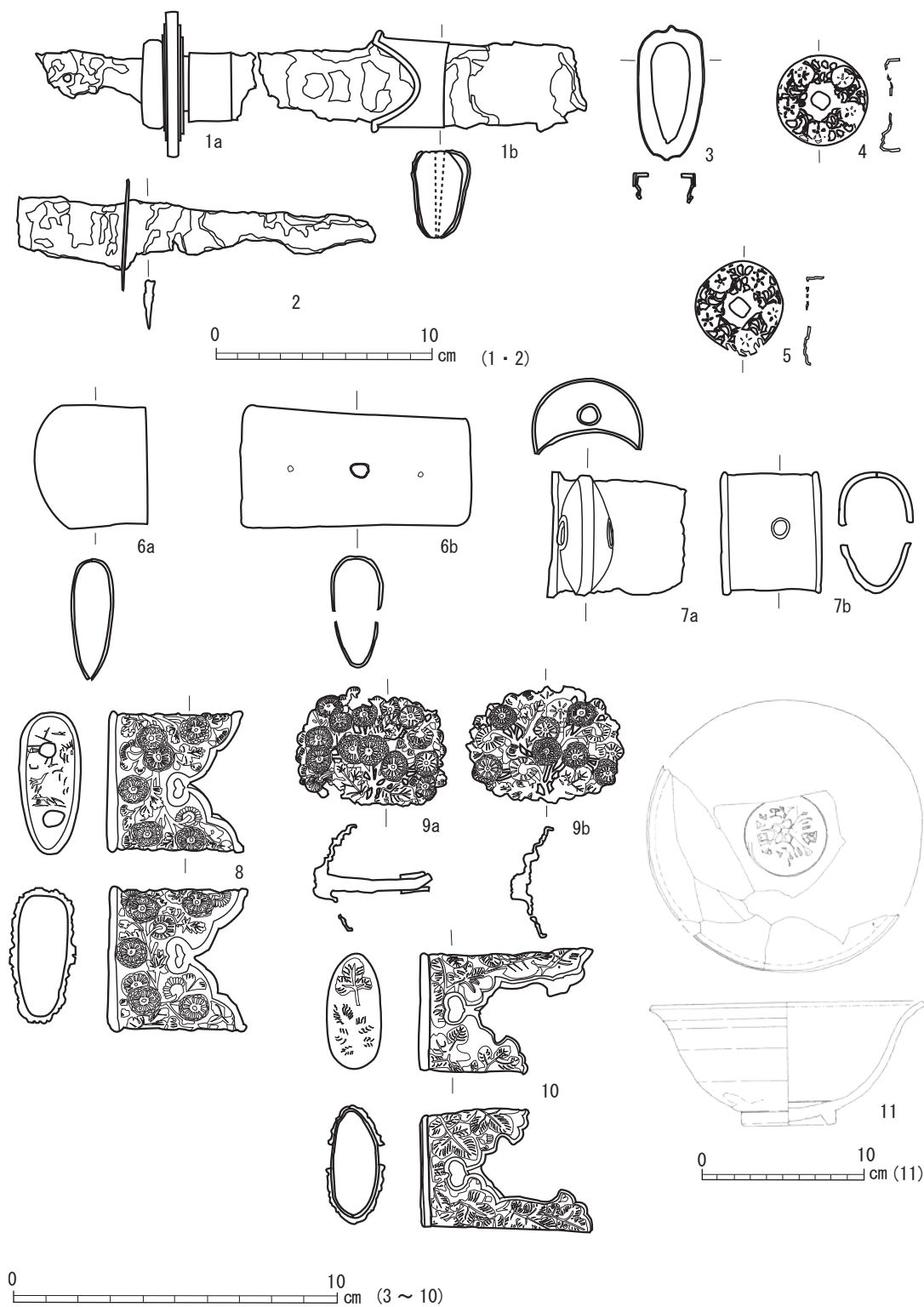


図6 北海道余市町栄町1遺跡出土遺物

(1 ~ 10 は筆者実測 11 は石井 2003 より転載)



し、アイヌの人々が宝物を埋納した場所と考えたい。

#### 【札幌市北1条西8丁目出土品】

北海道大学植物園博物館には明治20年（1887）に現在の札幌市北1条西8丁目から出土した鍬形（標本番号33188）星兜（同33189）・大鎧の脇冠板と思われる破片（同33187）が所蔵されている（図7）<sup>4)</sup>。

1と2はともに鍬形であり、同じ標本番号（33188）が付与されているが、別個体である。1は北海道内出土の鍬形を集成した宇田川氏や瀬川氏も取り上げているが、2は全くの未公表資料である（宇田川2003・瀬川2009）。1の本体は木胎鉄板貼で、飾金具・角の先端を覆う金具・覆輪は銀である。胴の中央には長形10.8cm・短径10.3cmの縦長の銀製円板の左右を鋲留めし、その上の左右に直径2.5cmの銀製の小円板を象嵌する。左右とも角の付け根には直径3.5cmの銀製円板が象嵌され、その先には幅0.9cm前後の帯状の銀板2条と直径2.5cmの銀製小円板を交互に4組配置する。角の先端の金具は、表は全面を覆うが裏側は縁の部分のみ覆っている。二股に分かれた角の先端には小さな孔があり、角にソケット状に差し込んだ先端の金具は鋲留めされていたことが判る。2は1とは違い厚みのある鉄を本体とし、銀製の覆輪がかけられている。表面には中央を鋲留めた直径2.5cmと1.5cmの銀製の小円板が残っている。なお、これらの銀製小円板とは別に2には直径7.5cmの鉄製の円板が付着しているが、この鉄製円板は偶然鉄錆により付いたもので、本来は別の製品の部材であったと考えられる。2についても1と同じく鍬形と考えられるが、管見の限りではこのような形状のものは類例を知らない。

3は矧板鋲留式の12間星兜の鉢で、長径約21cm、短径約20cm、高さ14.1cmである。眉庇は失われているものの、全体の形状をとどめている。形状は膨らみの少ない大円山形で、腰巻の裾がわずかに開く。矧板を留める鋲は鉄の塊を削って作った無垢星で、星の数は1行6もしくは7点とみられる。頂辺の座中央の孔は直径約4.5cmである。本資料は、北海道留萌市エンドマッカ（現塩見町）から出土した星兜（福士1985）とよく似ており、ともにその特徴から平安時代後期から末期に製作されたものとみられる。

4は大鎧の脇冠板の残欠と思われる。鉄地で内面に皮革が残存しており、銀の覆輪がかけられている。角に近い部分に紐通し用の孔があり、玉縁の銀製鵝目が付けられている。

以上、札幌市北1条西8丁目出土品は平安時代後期から末期に製作されたとみられる厳星兜と大鎧の残欠、2点の鍬形からなり、アイヌの人々が宝器を埋納した場所と考えられる。鍬形の製作時期は特定できないが、埋納時期は中世以前の可能性が高いように思われる<sup>5)</sup>。

アイヌの人々が土中に埋納したと考えられる宝物類が一括出土した事例としては、本稿で取り上げた3ヶ所以外に、28間星兜をはじめ小札・蝦夷太刀3点・腰刀2点・日本刀1点・筭・ニンカリなどが出土した深川市納内遺跡例（葛西・皆川・越田1992）、12間厳星兜をはじめ胴丸の杏葉・青磁碗・「青龍刀の如き刀」が出土したと伝えられる留萌市エンドマッカ例（福士1985）、兜の眉庇・刀・鐐が出土した足寄町トブシ例（宇田川校訂1983）、鍬形7点が一括出土した栗山町桜山例（東京国立

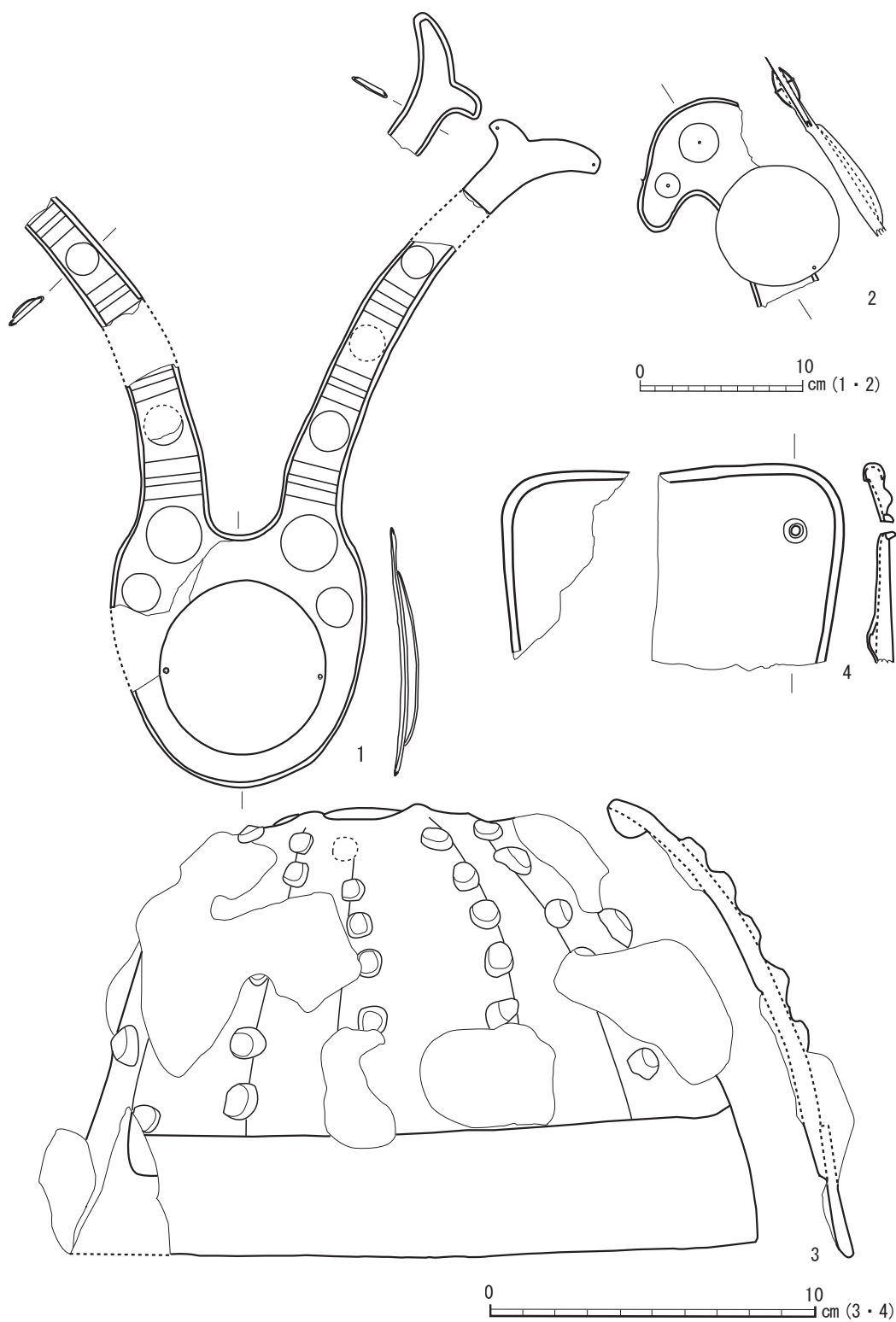


図7 北海道札幌市北1条西8丁目出土遺物

(筆者実測)

博物館1992、横田2002、瀬川2009)、星兜・胴丸の残欠・太刀が出土した釧路町頓化鉄道院用地例(東京国立博物館1992)がある。

## (2) ツクナイ・手印としての宝刀

ツクナイとは日本語の「償い」に由来し、アイヌが他のアイヌや和人に与えた損害や犯した罪に対し、宝物をもって賠償する行為と説明されることが多い。しかし差し出された宝物は必ずしも賠償品として相手側に没収されるのではなく、一定期間相手側に留め置かれた後、事態が解決・回復したと判断された段階で返されることを原則とする点が和人社会の「償い」と異なる。また、契約の際、その証拠として相手に宝物を渡し、約束が果たされるまで預け置くことを「手印」という。ツクナイも手印も差し出される宝物は一種の「担保」に近い。ツクナイや手印については菊池勇夫氏や岩崎奈緒子氏による優れた先行研究があり、近年では渡部賢氏がシャクシャインの戦い終結に際してのツクナイと起請文について論証を行っている(菊池1991、岩崎1998、渡部2007)。岩崎氏はアイヌのツクナイに用いられる宝物の筆頭に挙げられるものが刀剣類であると指摘した。ここでは先行研究に学びつつ、ツクナイや手印として出された宝物の実態を中心に検討する。

### ① シャクシャインの戦いに伴うツクナイ

永正12年(1515)のショヤ・コウジ兄弟の蜂起、享禄23年(1529)のタカサカシの蜂起、天文5年(1536)のタリコナの蜂起などシャクシャインの戦い以前の和人对アイヌの抗争や、天文19年(1550)の勢田内ハシタイン・志利内チコモタインとの和睦では、和人(蠣崎氏)側が宝物を用意してアイヌに見せるか、償いを出すなどしており、アイヌの側が和人からツクナイを要求されたのは、シャクシャインの戦いが初めてであるとした菊池勇夫氏の指摘は非常に注目される(菊池1991)。

「蝦夷蜂起」や「寛文拾年狄蜂起集書」(高倉編1969)によれば、松前藩は、シャクシャインの戦いの戦後処理として、東西蝦夷地のアイヌに、ツクナイを出さなければ商船を派遣しない旨通告したうえで、「自然ツクナイ出申間敷はふみつぶし可申候」と脅迫した。アイヌから提出されたツクナイの詳細は不明だが、高値になるものとして、「エモシポ二腰、こまき作り壹腰、壹腰はさやしたん、壹腰はしんちうにてけほりに魚類ほり候由。めぬき雉子、下地銀、上金ながし、見事に見得申候由」とあり、紫檀製の鞘に入った短刀や、魚の文様を毛彫りした真鍮製の鞘に入った短刀、銀地に金メッキした雉子形の日貫など和製の上手の刀類が含まれていたことが判明する。なお、こまき作りは小枵作りであり、アイヌが製作する彫刻を施した木製の鞘に入った刀のことと思われる。

### ② クナシリ・メナシの戦いに伴う手印

寛政元年(1789)5月飛騨屋久兵衛の請負場所で起きたクナシリ・メナシの戦い鎮圧のため松前藩が派遣した新井田隊は、「攻戦」のみでなく「潔白の理談」による鎮定を方針とし、手印を取り交わしながら、道東・クナシリ乙名層の協力を取り付け、鎮圧後には彼ら松前藩に御味方したアイヌ乙名層に「徒党」アイヌが差し出した手印を預け、地域の平和秩序の回復を委ねたとされる

(菊池2010)。

新井田隊が閏6月7日に十勝川河口のオホツナイ（豊頃町大津）に到着した際、メナシおよびトカチ地方のアイヌの首長層から、南部下北大畑湊村出身でアイヌの蜂起により負傷した大通丸水主庄蔵を通して鎮圧隊に差し出された手印が、松前藩鎮圧隊番頭新井田孫三郎が著した「寛政蝦夷乱取調日記」（高倉編1969）に記載されている。

一、銀覆輪二枚鍔壹枚	のつかまふ ヲヒヌカル
一、銀覆輪貳枚鍔壹枚 但し桐の模様	同所 ニサフロ
一、銀覆輪貳枚鍔壹枚 但し猪の獅子模様	同所しやもこたん ノチクサ
一、粕尾壹把	のつかまふ シツタフカ
一、エモシ壹振	同所 シヨンコ
一、金覆輪鍔壹枚 但し菊のすかし	あつけし リミシアイヌ
一、エモシボ壹振 但し竿添	とかち シヤムクシテ
一、エモシ壹振 但し銀地にてともゑの模様	しらぬか チヤラアイヌ
一、エモシ壹振 但し至て古物	ちうるい セントキ

上記の手印のうち、ちうるいの首長で和人殺害の首謀者の一人とされたホロメキの息子セントキだけは負傷した庄蔵を助けた「印」として差し出したものだが、他のアイヌは松前藩に御味方することの証として手印を提出している。手印の内訳は、鍔4枚、エモシ（太刀）3振、エモシボ（短刀）1振、粕尾（矢羽根の素材であるオジロワシの当歳の尾羽根）1把（1把＝10尻＝120枚）で、鍔が最も多い。銀覆輪二枚鍔とあるのは、銀覆輪の銅製鍔と同じく銀覆輪の銅製大切羽のセット（本論の図参照）であろう。手印として差し出されたこれらの鍔は、金や銀の覆輪や文様・透かしが施されており、上手の和製品とみられる。なお、これらの手印は鎮圧後に返還されている。

一方、「寛政蝦夷乱取調日記」と加賀家文書の「安政四年 黒白正調書」には、クナシリ・メナシの戦い鎮圧後にお詫びのために手印を差し出したアツケシ7名・ノツカマブ6名・クナシリ6名、計19名のアイヌの名前と差し出された品名が記されている（「安政四年 黒白正調書」にはニサフロの記載がない）。

一、タン子フー振	アツケシ土人	エコトキ
一、ニシヤハヤレキモシホー振		同人母ヲツケニ
ウタヨハケ		
一、同一振		シモチ
一、タン子フー振		イニンカリ
一、カニウエエモシホー振		シウチヤシクル
ウタヲハケ		
一、タン子ブー振		ニシコマツケ
一、エモシホー振		エツトルカ
一、タン子エモシホー振	ノツカマブ土人	シヨンコアエノ
一、タン子フー振		ノチクサ
一、エモシホー振		ニサフロ
一、エモシホー振		ホロヤ
一、シャヒシエモシホー振		コエカアエノ
一、カテカ子エモシホー振		ハシタアエノ
一、タン子エモシホー振	クナシリ土人	ツキノエ
一、同一振		カンタク
一、エムシー振		ウテクンテ
一、同一振		イコリカヤニ
一、同一振		シコシヤク
一、同一振		トヘウシ

この史料から、クナシリ・メナシの戦い鎮圧後にアイヌから差し出された手印は全て刀類であること、アツケシ乙名のイコトイとニシコマケ・ノツカマブ乙名のシヨンコ・クナシリ惣乙名のツキノエ・アツケシバラサン乙名のイニンカリ・シヤモコタン乙名のノチクサといった乙名層からはタン子フ、すなわち金物拵の太刀が、アツケシ脇乙名のシモチ・クナシリ脇乙名のイコリカヤニからはエムシ、すなわちアイヌ自製の木製の拵に入った刀が、それ以外の人々からはエモシモ（短刀）が差し出されており、刀類には価値の高いものからタン子フ・エムシ・エモシモの序列があることが確認できよう。

注目すべきは、前述した鎮圧隊が現地入りする前にアイヌから御味方の証として提出された手印が鐙を主としていたのに対して、賠償の意味合いが強い鎮圧後の手印がすべて刀類となっている点である。差し出された19振の刀類は松前藩に「永く御留」されたとあり、事実上没収されたとみられることも、象徴的ではあるにせよ刀狩り（武装解除）の意味合いがあったことが読み取れよう。

### ③ その他のツクナイ

寛政2年(1790)の「蝦夷国風俗人情の沙汰」(高倉編1969)のなかで最上徳内は、ラッコ皮・鷹の羽・



アシカ・アザラシ・熊皮・熊膽・エブリコ（万能薬となるサルノコシカケ科の多年生菌）等の課税役人（「上乘」）として松前藩からアツケシに派遣されていた松井茂兵衛が、クナシリ産の偽の熊膽を巡って通詞の林右衛門に入牢を命じ、林右衛門救出のため、アツケシの惣乙名イコトイをはじめとする近郷近在の乙名達がツクナイとして差し出した「山中へ深く埋め或は古木の朽たる筐へ入れ秘蔵せし陣太刀、鞘巻の太刀、合口、短刀、其他宝物」など「此處の善き宝物」を全て自分の物とし、松前に戻ったのち松井茂兵衛がそれらを売り払い大金を得たことを、批判的に記している。その中には1振30両にもなった陣太刀があったとも述べられている。

余市の場所請負人であった竹屋の「林家文書」にある天保14年（1843）の「詫一札之事」と題する古文書（駒木根2009）は、運上屋以外の出稼和人と、自家用のニシン・ニシンの白子・数の子・笹目（ニシンの腸と鰓が混ざった乾燥品）の商取引をした下ヨイチアイヌが運上屋に出した詫び証文で、謝罪の証拠として差し出された具体的な品々が判る貴重な史料である。史料によれば、科人の乙名ヲシトンコツから銀拵イカエフ（矢筒）1・銀拵イムシ（太刀）2・イムシ（大小取合）4の計7点、科人の母ケウシから銀フクリン（覆輪）の鰐？、脇乙名イコンリキ・小使ホフイ・産取で科人の弟レフン・産取イヌヌケ・産取ヌケル・平夷人チ子ヘカの5名からは各々鰐1枚、小使カ子ヤからはイムシホ（短刀）1点、産取タサラからはイムシ（太刀）1点、産取ヒラトモからはイカイフ（矢筒）1点がツクナイとして問題解決までの間、運上屋に預け置かれている。ここでは、ツクナイが科人本人のみならず、所属する共同体全体の連帯責任として役夷人を中心に提出されていることと、家宝の中でも太刀・短刀・鰐・矢筒が選ばれている点、銀拵・銀装のものが一定量認められる点を確認しておきたい。

以上、いくつかの史料からツクナイ・手印の対象となる宝物について検討した。史料的制約からアイヌの人々のなかで取り交わされるツクナイの中身については不明とせざるを得ないが、アイヌから和人に対して差し出されるツクナイ・手印の大部分は刀類であり、鰐と矢筒がこれに次ぎ、漆器は皆無に近いことが判明した。

和人を相手に行われたツクナイや手印は、賠償・弁償から忠誠・服従の証明、さらには約束手形的なものまで多様だが、当事者に加え連帯責任としてその者が所属する共同体の指導者層が負担するものであること、宝物の中でも刀類が特に選ばれることが特徴としてあげられる。

### (3) アイヌの刀をめぐる習俗

アイヌの人々は刀類や刀装具を時に呪術的な力を持った道具と考えていた。メッカ打ちや、ニウエンと呼ばれる呪術的な舞踏行進では刀が重要な役割を果たしている。

メッカ打ちとは、死者の近親者の額（地方によっては頭または背）をエムシ（太刀）の背で血の出るまで打つ行事で、弔い客も同様に打たれるという（河野1951）。メッカは背（刀背）を意味するアイヌ語のmekkaに由来し、その目的は、身体についた悪神を払うことという。享保5年（1720）完成の新井白石の「蝦夷志」に登場し、寛政11年（1799）成立とされる秦檜磨筆「蝦夷島奇観」（東

京国立博物館蔵)にはメッカウチの図(萱野編1995の18頁)がみられる。なお、松田傳十郎の『北夷談』にはアツケシの惣乙名イコトイがあちこちでチヤアランケ(「公事喧嘩」)を仕掛け、メッカ打ちをして負けた側から償いとして、刀・脇差・袴・塗ものの類などの宝物を差し出させたため、「東地一番の宝持」と称するとの記載が見られる。これについては久保寺逸彦氏が指摘するように、和人が太刀によるメッカ打ちとスツと呼ばれる棍棒による制裁を混同し、またスツ打ちが興行化されていたことを物語る(佐々木編2001)。

また、凶事における悪霊退散や遠くから帰ってくる舟を迎える場合などに行われる呪術的な舞踏行進(ニウエン)では、男たちが抜身の太刀を振りかざし力を込めて足を踏みしめながら行進する。また、舟上でも太刀や鎧を抜き放ち掛け声激しく船を進める。ニウエンもまた、秦檜磨の「蝦夷島奇観」に図(谷本2000の229頁)がみられ、メッカ打ち同様、和人の眼に奇異に映る風習であった。ウケウエホムシュとも呼ばれるニウエンの起源は古く、正平11・延文元年(1356)成立の『諏訪大明神絵詞』には蝦夷が千島に戦場に臨む際に甲冑に身を固めウケウエホムシュを行う人々が住んでいたと記されている。

#### (4) 蝦夷拵の太刀・腰刀の製作と流通

日本刀とは著しく異なる蝦夷刀について、18世紀に書かれた蝦夷地に関する紀行文などには、カラフト産とする見方がみられる。例えば、古いところでは、元文4年(1739)成立とされる「蝦夷随筆」(寺沢・和田・黒田編1979)のなかで筆者の坂倉源次郎は、「エグシ蝦夷細工にてはなし。カラフト渡りなり。銀の多き所か大方銀のがざりにて、獣草などの彫物あり。刀は八、九寸ばかりありて赤さびになりてあり。夷殺害の事なき故刀を磨くこともなく、宝物として秘し置故なり」と述べ、銀拵の蝦夷太刀がアイヌ自製のものではなく、カラフト産との見方を示している。その一方で俗に「蝦夷後藤」と呼ばれる手の込んだ刀装具については、昔、畿内の戦乱を避け近江から松前に渡った金工家の後藤一門がアイヌ向けに製作したもので、今では松前やその周辺からは姿を消し、山奥のアイヌが稀に伝世品を所持していると述べている。天明8年(1783)に幕府巡見使に随行して松前に渡った古川古松軒も、「東遊雑記」(大藤編1964)のなかで、「太刀も数多あることにて、何れも北方の遠き島より前まえは渡りしものと見えて、制の違いあり」と述べ、多様な蝦夷太刀すべてがカラフト産との見方を示している。

確かに、ヴェリユの「世界図」(1562年)やオルテリウスの「太平洋図」(1589年)では北海道島がIsla de Plata(銀の島)と表記され、オランダ東インド会社の金・銀島探検計画により1643年に北海道島太平洋・オホーツク海沿岸・南千島・樺太南部の東海岸を周航したフリース船隊の航海記録(北構1983)には、カラフト(サハリン)島タライカ湾沿岸やウルップ島で、原住民が銀拵の刀を所持しているとの記載がある。しかし、実際にはカラフト(サハリン)島はもちろん、沿海州においても金物装飾に富むタイプの蝦夷刀が製作された痕跡は全く確認できない。

一方、田沼意次政権による天明5・6年(1785・86)の蝦夷地探検隊の見聞記録である「蝦夷拾

遺」では、蝦夷太刀はみな本朝の衛府の太刀鞘巻あるいは山刀などの古物で、およそ刀身は失われており、「蝦夷後藤」と呼ばれる金具は古代の江州彦根の柳川製のように見えるとし、さらに今エムシとしてアイヌの人々に渡しているのは「松前及秋田淳代等の麤鍛冶が作りたる鈍鍛ひなり」と述べられている。琵琶湖の湖畔に位置する柳川は、松前に進出した近江商人の主要な出身地であり、その意味では蝦夷地との繋がり深いものの、柳川で「蝦夷後藤」と称されるような上手の刀装具が生産されていた形跡は全く確認できず、その可能性は低いといわざるを得ない。それに対して18世紀代に松前や日本海交易で栄えた秋田や能代でアイヌ向けに下手の刀や刀装具を製作している可能性は高い。

結論から言えば、木製・樹皮巻の鞘や柄などの拵やそれに付く金属板を少し加工した程度でできる金物類はアイヌの人々の手になるものだが、平造りを特徴とする刀身は勿論、鏢をはじめとする金属製の刀装具の大部分は、和製と考えるべきである。しかし、問題はそれが和製だとしても、日本国内のどこで作られ、どのようなルートでアイヌの人々の手に渡ったかである。その答えはウイマムと呼ばれる藩主への御目見儀礼やオムシャと呼ばれる会所で行われた下賜・支給儀礼に求めることができよう。

松前藩のウイマム（御目見）について検討した菊池勇夫氏は、「松前主水広時日記」にある事例を挙げ、アイヌ乙名層の代替わりの際の御目見において行われる松前藩主とアイヌとの間に刀の献上・下賜のやり取りが、アイヌの松前藩に対する忠誠と松前藩による乙名としての認知が相互に確認されたと指摘する（菊池1991）。菊池氏が例として挙げたのは元禄5年（1692）5月29日のアツタ酋名（乙名）シモタカ犬と同年6月2日のナコタラへのモネヅシ・オサルシモの御目見で、どちらもアイヌからは手印として小柁作り（アイヌが製作する彫刻を施した木製鞘に入った刀と思われる）1振が献上され、藩主（松前矩廣）からはエモシポ（短刀）が下賜されている。

領内に住むアイヌのウイマム（御目見）の際、盛岡藩や弘前藩でも同様の蝦夷刀の下賜が行われていたことを筆者も指摘したことがある（関根2007a・2007b）。寛文5年（1665）7月に行われた南部領下北アイヌの「御目見」では、盛岡藩主から「夷太刀」が下賜されており（盛岡藩雑書：『青森県史』資料編近世1の421頁所収）、弘前藩でも享保9年（1724）2月17日、5代藩主津軽信寿が弘前城の武具蔵より「狃刀二腰」を取り出させ手元に置いたとの記事が藩庁日記（国日記）に見られる（『青森県史』資料編近世1の557頁）。いずれも藩が領内の本州アイヌを支配する道具として、「狃装束」の最も重要な要素である蝦夷拵の刀を管理し、時に下賜していたことを示している。

武家社会では主従関係を確認する御目見の際、刀剣類の下賜は一般的にみられる行為であり、藩主からアイヌの乙名層への蝦夷刀の下賜もその延長線上に位置づけられよう。しかし、ウイマムは本来、異なる社会集団や民族間での儀礼的要素を含んだ交易や贈答であったわけで、近世幕藩体制成立以前、あるいは成立以後も、和人とアイヌの関係性が大きく変わるシャクシャインの戦いまでは、アイヌの人々は刀類（日本刀を含む）をそうした交易や贈答という形で和人から入手していたと想定できよう。シャクシャインの戦い以降、アイヌの人々が日本刀を入手する機会は失われた。

蝦夷刀の場合、時代を遡れば遡るほど交易に近く、時代が下るにつれ贈答儀礼的意味合いが強くなり、最終的にウイマムやオムシャの際の下賜という形が定着したのではなかろうか。実際、蝦夷地交易品目のなかに刀類はほとんど確認できず、管見では松田傳十郎『北夷談』（大友1944）で山丹交易における蝦夷刀の交換比率が、蝦夷刀1振＝北蝦夷地産貂皮9枚＝米18升と示されているのを確認したにとどまる。シャクシャインの戦い以降は、基本的に蝦夷刀が純粋な商品（交易品）として一般流通することはなくなった可能性を指摘しておきたい。

一方で、藩主松前家や松前藩の重臣が蝦夷刀を保持していたことを示す資史料はウイマム（御目見）に関する史料以外にも存在する。

伝世品としては、越後黒島の阿部家に伝わった蝦夷拵腰刀（新潟市指定文化財）が挙げられる。この腰刀は、柄全体と鞘の両端を桐と鳳凰を高彫りした銀板で包んだ典型的な蝦夷拵の腰刀で、江戸後期の阿部家の当主良伯の実弟が松前藩医を務めた際に下賜されたものという（新潟市2002）。

寛政10年（1798）に近藤重蔵・村上島之丞らとともに北方探検をおこなった水戸藩医師木村謙次（1752－1811）の「北行日録」（山崎編1983）には、「厚谷新下蝦夷後藤刻刀飾ノ器ヲ示ス、牡丹彫金ノスリハゲ銀ノ色ヲアラハシタルモノナリ」との記述がみられ、松前藩の近侍番頭や奥用人を務めた厚谷新下貞政が「蝦夷後藤」と称される牡丹文が高彫された上手の銀製刀装具を保持していたことが判る。

江戸時代には、本州でそうした蝦夷刀や蝦夷拵を製作していた形跡は全く確認できていないことから、それらの主たる生産地は松前城下と考えるのが妥当であろう。青森市浪岡城跡や青森県八戸市根城跡からは蝦夷拵用と思われる質の劣る太刀鐔の鋳型が発見されており（関根2007a・2007b）、戦国期には道南の松前・上之国・下之国周辺に加え、北奥の主要な中世城館やその城下でもアイヌ向けの刀や刀装具が作られていたとみてよいだろう。一方、京で作られた上手の刀装具は、日本海交易によって北海道島や北奥に運ばれた後、アイヌの人々によって蝦夷拵に組み立てられたとみられる。

## おわりに

アイヌの人々が本州から渡来した古い武器・武具やそれを写したものを宝物として珍重し、時にそれらの道具が社会の様々な問題を解決する術として機能する様は、アイヌ社会を観察する機会を得た和人の眼には奇異に映ったようであり、紀行文などに記録された。

一方、中世の和人社会においても、中国産の倣古銅器や高級陶磁器類が座敷飾りや茶道具として珍重され、大名物の茶道具に破格の値が付き、武功に対する恩賞となるなど、特別な扱いを受けた。例えば、日本社会では、鎌倉時代以降ずっと中国産の天目茶碗に対する需要があり、中国で天目茶碗の生産が衰退した明代以降も中国から宋や元代に作られた古物が輸入され、あるいは瀬戸窯などで古い唐物天目碗を模した製品が作られ続けた。それは本州で武器・武具としての太刀や大鎧・胴丸が廃れた後も、アイヌの人々がそれらを求め続けた姿に重なる。日本の武家社会が宋風の宗教文

化に根差した唐物を良しとしたように、アイヌ社会では中世前期の和製武器・武具が好まれ続けた。

本稿では、和人によって書き留めた古記録類や出土資料を通してアイヌの宝物の頂点に和製の武器・武具やそれを写したものがあり、それらはアイヌ社会の中で、あるいは和人との関わり合いの中で、集団関係を円滑化する機能を持っていたことを確認した。そうした価値観は、出土品からみてアイヌ文化成立期にまで遡る可能性が高く、古記録から19世紀に至るまで長く保持され続けたことが判明する。

本稿では、アイヌの刀類は、彼らの手になる木製あるいは金属板に簡単な加工を加えた刀装具を除き、基本的に和製であり、古くは交易品であったが、時代が下るにつれ贈答儀礼品となり、最終的にはウイマムやオムシャの際の下賜品になったとの見方を示した。また、京で作られた上手の製品を除き、蝦夷刀・蝦夷拵の主たる生産地は、中世には上之国・下之国や津軽・南部といった津軽海峡周辺域、近世には松前城下と推定した。今後、松前城下の発掘調査が進み、松前での金属加工の実態が解明されることを期待したい。

### 【謝辞】

本研究は関根を研究代表者とするJSPS科研費22242024の助成を受けたものです。

大浜中遺跡・栄町1遺跡出土品の調査では乾芳宏氏（余市町教育委員会）に、札幌市北1条西8丁目出土品の調査では加藤克氏（北海道大学北方生物圏フィールド科学センター）に、それぞれお世話になった。史料の解読には小田桐睦弥さん（弘前大学特別研究員）からご教示を得た。図版作成にあたっては舩谷顕一氏（弘前大学卒業生）と佐藤里穂さん（弘前大学大学院生）の協力を得た。末筆ではありますが、記して感謝申し上げます。

### 【註】

- 1) 例えば東北歴史博物館が所蔵する杉山寿栄男氏旧蔵の重要文化財「白長覆輪太刀」は北海道沙流郡で、同じく「銀蛭巻太刀」は樺太の東多来加（現ロシア連邦サハリン州ボロナイスキー区プロムイスロヴォーエ）で収集されたものである（東北歴史博物館2001）。
- 2) 摩周湖南東の西別岳に源を発し根釧台地を経て別海でオホーツク海にそそぐ西別川はサケの名産地として知られ、そこで獲れるサケは「西別鮭」として評価が高い。
- 3) 栄町1遺跡で刀や鎧が出土したとの報を受けた名取武光氏が調査を行ったが、出土状態に不自然さを感じた沢口清氏が第一発見者に確認したところ、正式な調査前に発見されたとされる「刀と鎖、鎧」は実は大浜中遺跡から発見されたものであることが明らかになったという（佐藤1992）。
- 4) 星兜と鉞形の出土地については加藤克氏の詳細な検討により、札幌市北1条西8丁目であることが突き止められた（加藤2001）。
- 5) アイヌの鉞形の編年を行った瀬川拓郎氏は、アイヌの鉞形は17世紀に成立したとし、札幌市北1条西8丁目出土の鉞形（本論図7-1）の年代をⅢ群（19世紀前半）としている。瀬川氏の考えが正しいと



すると、この鍬形は作られてから明治20年（1887）に発見されるまで、50年前後しか土中になかったことになる。また、その場合、一緒に掘り出された12間巖星兜（図7-3）や大鎧の脇冠板（同4）とは年代があまりにかけ離れ、到底一括埋納資料とはみなせなくなる。しかし同じ場所から同時にこれらの宝器が出土している以上、一括埋納遺物とみるのが自然である。瀬川氏は材質について銅と亜鉛の合金である真鍮から鉄へ変化したとし、真鍮の国内生産が始まる17世紀を上限としているが、筆者はこの考え方に反対である。鍬形に限らず、17世紀以前のアイヌの金属製品には刀子にしても矢筒にしても鉄地に銀で装飾したものが多くみられることから、鍬形に関しても札幌市北1条西8丁目出土の鍬形（本論図7-1・2）のように鉄地や木胎鉄板貼りに銀象嵌のものが古く、真鍮製のものが新しいと考えるべきである。

## 【引用文献】

- 青森県2001『青森県史』資料編近世1（近世北奥の成立と北方世界）
- 秋葉 実編1989『北方史料集成』2（加賀家文書）、北海道出版企画センター
- 厚真町教育委員会2011『オニシキベ2遺跡』
- 石井淳平2003「栄町遺跡・大浜中遺跡出土の中世陶器について」『余市水産博物館研究報告』6、1～6頁
- 岩崎奈緒子1998『日本近世のアイヌ社会』、校倉書房
- 宇田川洋1981『アイヌの伝承と砦』、北の教養選書3、北海道出版企画センター
- 宇田川洋校訂1983『河野常吉ノート』考古編2、北海道出版企画センター
- 宇田川洋2003「アイヌ文化の形成過程をめぐり一試論」『国立歴史民俗博物館研究報告』107、217～250頁
- 内田武志・宮本常一編1971『菅江真澄全集』2、未来社
- 恵庭市教育委員会1997『ユカンボシE4遺跡』
- 恵庭市教育委員会2000『カリンバ2遺跡第IV地点』
- 大友喜作1944『北夷談・北蝦夷図説・東蝦夷夜話』、北光書房
- 葛西智義・皆川洋一・越田賢一郎1992「深川市納内遺跡出土の遺物について」『北海道考古学』28、北海道考古学会19～35頁
- 加藤 克2001「北海道大学農学部博物館所蔵考古学資料（1）」『北大植物園研究紀要』1、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園、19～34頁
- 萱野 茂編1995『アイヌ民族写真・絵画集成』1（祭礼）、日本図書センター
- 菊池勇夫1991『北方史のなかの近世日本』、校倉書房
- 菊池勇夫2010『十八世紀末のアイヌ蜂起ークナシリ・メナシの戦い』、サッポロ堂書店
- 北構保男1983『1643年アイヌ社会探訪記ーフリース船隊航海記録ー』、雄山閣出版
- 金田一京助・杉山寿栄男1943『アイヌ芸術』3（金工・漆器篇）、第一青年社
- 河野広道1951『アイヌの話』（『河野広道著作集Ⅱ 続北方文化論』に再録）
- 小浜基次・峰山 巖・藤本英夫1963「有珠善光寺遺跡」『北海道の文化』特集号、北海道文化財保護協会、

38～124頁

駒木根恵蔵2009「ヨイチ場所でのアイヌと出稼和人の取引について」『北の資料』127（「資料で語る北海道の歴史」講演会講演録）、北海道立図書館

佐々木利和編2001『久保寺逸彦著作集』1（アイヌ民族の宗教と儀礼）、草風館

佐藤矩康編1990『鉄器が語る余市の文化』、(財)佐藤奨学会

佐藤矩康1992『埋もれていた余市の宝物』、北海道文化財保護協会

瀬川拓郎2009「宝の王の誕生－アイヌにの宝器「鋏形」の起源をめぐる型式学的検討－」『北海道考古学』45、北海道考古学会、1～14頁

関根達人2007a「本州アイヌの生業・習俗と北奥社会」『北方社会史の視座』1、清文堂、217～250頁

関根達人2007b「本州アイヌの考古学的痕跡」『アイヌ文化の成立と変容』、法政大学国際日本学研究所、797～823頁（榎森 進・小口雅史・澤登寛聡編2008b『北東アジアのなかのアイヌ世界』、岩田書院、317～343頁に再録）

関根達人2011「出土茶道具・仏具からみた蝦夷地の内国化－平成22年度北海道北斗市矢不來館跡の発掘調査を踏まえて－」『日本考古学協会第77回総会研究発表要旨』、72・73頁

高倉新一郎編1969『日本庶民生活史料集成』4、三一書房

谷本一之2000『アイヌ絵を聴く』、北海道大学図書刊行会

寺沢 一・和田敏明・黒田秀俊編1979『北方未公開古文書集成』1、叢文社

東京国立博物館1992『東京国立博物館図版目録』アイヌ民族資料篇、東京美術

東北歴史博物館2001『杉山コレクション アイヌ関係資料図録』

新潟市2002『新潟市の文化財』、新潟歴史双書6

北海道開拓記念館2001『知られざる中世の北海道－チャシと館の謎にせまる－』、開館30周年記念事業第52回特別展図録

北海道埋蔵文化財センター 1996a『美沢川流域の遺跡群XⅧ』、北海道埋蔵文化財センター調査報告102

北海道埋蔵文化財センター 1996b『美沢川流域の遺跡群XⅨ』、北海道埋蔵文化財センター調査報告113

北海道埋蔵文化財センター 1996c『美沢川流域の遺跡群XⅩ』、北海道埋蔵文化財センター調査報告114

福士廣志1985「北海道留萌市出土の星兜鉢および杏葉残欠について」『考古学雑誌』71-1、日本考古学会、88～103頁

松下 亘1984「北海道出土の中国陶磁」『北海道の研究』2（考古篇Ⅱ）、清文堂、271～305頁

山崎栄作編1983『北行日録』

横田直成2002「栗山町桜山出土の『鋏形』」『北海道の文化』74、北海道文化財保護協会、115～129頁

吉岡康暢2001「北方中世史と大川遺跡」『大川遺跡における考古学的調査』Ⅳ、余市町教育委員会、401～448頁

留萌市海のふるさと館2005『海峡を越えてきた武具－中世の蝦夷地』、第17回特別展図録

渡部 賢2007「「ツクナイ」と起請文」『アイヌ文化の成立と変容』、法政大学国際日本学研究所、531～

564頁（榎森 進・小口雅史・澤登寛聡編2008b『北東アジアのなかのアイヌ世界』、岩田書院、151～184頁に再録）